

報告1

鞠智城と地域社会 —「辺要」としての地域のなかで—

報告者紹介

吉村武彦（よしむら たけひこ）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、千葉大学専任講師・助教授・教授を経て、明治大学文学部教授・大学院長を歴任。現在、明治大学名誉教授。博士（文学）。著書に『日本古代の社会と国家』『大化の改新を考える』『蘇我氏の古代』など多数。専門は日本列島の古代史。

鞠智城と地域社会 —「辺要」としての地域のなかで—

明治大学名誉教授 吉村 武彦

はじめに

「鞠智城と地域社会 —「辺要」としての地域のなかで—」というテーマで報告させていただきます。律令制国家における「辺要」とされた筑紫の地域において、鞠智城の問題を考えてみようという意図です。

キーワードは「辺要」ですので、最初に辺要について述べたいと思います。

この言葉は、律令法の用語です。官人の居住地の問題として出てきますが、要するに、「辺にあつて要となす地域」のことです。職員令大国条においては、蕃国、夷狄に対する国として、東北地方の陸奥、出羽、越後が蝦夷対策の国々になります。一方の九州では、壱岐・対馬、日向、薩摩、大隅があがっています。朝鮮半島、中国大陸に対する壱岐・対馬と九州南の隼人に対する日向、薩摩、大隅の国が、蕃国、夷狄対策の国にあげられております。

話を分かりやすくするために、九州の筑紫における辺要政策の歴史を最初に述べてみたいと思います。

第一段階として、七世紀半ばの大化改新の時期を設定したいと思います。東北では蝦夷対策として、日本海側の淳足柵と磐舟柵、太平洋側では文献史料にはないのですが、発掘調査により仙台にある郡山遺跡が蝦夷対策をもつ施設として設置されたことが分かっています。

九州ではどうでしょうか。筑紫大宰は推古朝に最初に出てきますが、大化五年に筑紫大宰の帥、つまり長官の名があります。おそらく、東北の蝦夷対策と同じように、半島・大陸の蕃国対策とともに隼人対策の官職と施設があったものと思われます。

第二段階として六六三年における朝鮮半島での白村江の戦いに大敗した後、西日本に造られた古代山城、ふつうに言えば朝鮮式山城になりますが、防人などの配置をした西日本の国防体制ができました。これは大宰府とともに、対馬・壱岐から瀬戸内沿岸、そして大和の高安城に続くという、朝鮮式山城と称される古代山城が造られます。



ところが第三段階になると、大宝令の軍防令による国防体制が構築、それと同時に朝鮮半島の新羅、あるいは、中国大陸の唐との外交関係が安定化したしまして、西日本の防衛体制というか、対馬から高安城にかけた国防体制が廃止されることになります。つまり、朝鮮式山城の築城が止められるわけであります。朝鮮式山城の築城

筑紫では大宰府体制自体は維持されて、私は、鞠智城がそこに組み込まれているのではないかと考えております。つまり鞠智城を、大宰府防衛体制の一環として捉えたいと思っています。

[illegible]

一 律令制国家の辺要政策―律令法の辺要と「辺要」

第一章の「律令制国家の辺要政策」の要旨を述べます。大宝令においても、条文には「辺要」とあります。辺要となる地域は、大宝令に規定はありませんので、大宝令あるいは養老令の注釈書から考えていきます。職員令の大國条には、辺



図2 (『新版古代の日本』3 角川書店、1991年)



(『古代山城鞠智城を考える』山川出版社、2010年)



図1 西日本の古代山城（朝鮮式山城）

が近いことになります。

辺要地に設置される山城などの施設の名称ですが、東北と九州では異なっています。筑紫の場合は、「城」と書きます。東北の方は、元は「柵」なんです。律令法の条文である衛禁律越垣及城条から分かります。東北の方は、最近では「国司分担統治政策」とも指摘されています（三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」）。国司が国衙だけ

ではなく、城柵にも滞在して国の支配に関わっていると言われています。筑紫では、そうした国司の分担はないと思いますが、大宰府のシステムとしては大野・基肆・鞠智城が一体として扱われているのではないかと考えています。

二 筑紫（西海道）の辺要政策と古代山城

次に第二章の要旨に移ります。筑紫の辺要政策をどのように考えていくか、ということです。遡って言いますと、大宰府の端緒として那津官家なつのみけがあります。『日本書紀』では宣化天皇紀にあります。が、事実かどうかは不明です。ただし、対外関係の記述になっており、元はこれが中心の職務かと思えます。そして、推古十七年（六〇九）の筑紫大宰の記事になります。

ところで、かなり前から亀井輝一郎さんによって、大宰と総領は違うということが言われています（「大宰府覚書」）。九州の古代史研究者も、大宰と総領とを区別して考察する方が多いようです。

私も今回、改めて報告を準備する過程で、やはり大宰と総領を分けて考えた方がいいように思いました。ただし、『書紀』その他の史料では、混乱して使用されている箇所もあり、大宰と総領とを明確に区別して解釈することは難しい記事もあります。

こうした大宰・総領制のなかで、西日本の朝鮮式山城の築城には特徴があります。狩野久さんが指摘されていますが、総領が設置されていた時期に、古代山城ができるという現象があります（「瀬戸内古代山城の時代」）。

筑紫大宰の場合、初見は推古朝です。推古朝には官司制が造られてくるので、筑紫大宰のような官司が存在してもおかしくはないと思います。ただし、『書紀』だけで判断するのは難しいかもしれません。続いて『書紀』では、皇極二年条に外交関係の筑紫大宰の記事が2カ所あります。そして大化五年条に長官（帥）に任命する記事になります。このように史料はきわめて少ないのですが、大化前代に外交関係の担当部局があったことはまちがいないでしょう。

律令法では、大宰府関係の事項に防人司ぼんりょうしと呼ばれる役所があります。厳密にいきますと、大宝令では「防司」と表記され、後に防人司と呼ばれる官司です。官僚制機構のなかで、防人が位置づけられていることになります。

筑紫における防衛体制で重要なのは、この防人と兵士です。防人は、東国から派遣されるわけですが、八世紀において停止される時期があります。防人が停止されれば、国防体制はどうなるのでしょうか。

うか。その際、兵士、とりわけ筑紫の兵士が動員されることになります。最近の研究によりますと、大宰府には筑前だけではなく、肥後国からも大宰府防衛の兵士が行くという指摘もあります。こうした可能性はありますが、そうしますと肥後国の場合、肥後国を守るという任務と大宰府の防衛があることになります。ただし、具体的事実を示す文字史料が乏しいものですから、実態はよく分からないところがあります。

対隼人政策に関しては、大宝令以前では九州島の東側は日向国、西側は肥後国が直接対峙しています。具体的に城が築城されているかが問題になります。こういう意味では、『続日本紀』文武三年（六九九）条にみえる三野城と稻積城の場所が問題になります。三野城は日向国児湯郡三納郷、稻積城は大隅国桑原郡稻積郷（当時は日向国）の地に想定していいかと思います。いずれも旧日向国ですが、筑前国（福岡県）で想定するのではなく、南方の隼人対策として城を考えた方がいいように思います。発掘調査はされておらず、地名が残っているだけですが、事実であれば隼人対策として重要な意味をもちます。

以上のように筑紫における辺要地の問題を述べてきましたが、筑紫大宰の場合、遣隋使や遣唐使の派遣がありますから、七世紀の推古朝の外交施設との関係が気になります。ただし、同時代史料からは確かめられません。そして、孝徳朝における筑紫大宰についても、『書紀』に記事があるだけです。隼人対策があつたかどうかはわかりませんが、孝徳朝における対蝦夷政策をみていきますと、対

隼人策があつてもいいように思うわけです。

東北では、日本海側では『日本書紀』に書かれている。ところが、太平洋側では名称すら出てこない。それが郡山遺跡にあたるわけです。孝徳朝における史料の散逸問題を考えますと、九州でも「史料にないから、ない」とは言えないのではないかと思うのです。歴史学は想像ではありませんが、記録が残っていない問題をどう考えるか、ということです。

九州の場合、筑紫大宰が対外関係と密接なことは容易に推測できますが、隼人との関係はどうなのでしょう。史料には『書紀』履中即位前紀に、いわゆる近習隼人が記されています。それ以前の神代には、皆さんもご承知でしょうが、海幸彦・山幸彦の神話の中に隼人の話があります。兄（海幸）のホノスソリ（火闌降命）が、弟（山幸）に隷属し、隼人らの始祖とされています。

一方、クマソ（熊襲）に関しては、ヤマトタケル（『古事記』は倭武命）伝承です。『古事記』では、ヤマトタケル（元はヤマトヲグナ）はクマソタケルを征討し、そのタケルの名を献上されて、ヤマトタケルを名のようになります。このように大化前代から伝承を持っているかと思えます。それはともかく、大宝令以前に関しては、隼人に対しては日向と肥後が対峙していたでしょう。

中央政府は辺要国に対して、東北には柵を設置し、九州には筑紫城を設けています。この筑紫城には、大野城・基肄城・鞠智城は含まれるでしょう。文武二年条に、この3城が出てきますが、一体として運営されていたと考えていいのではないのでしょうか。

ところが、考古学の赤司善彦さんの研究「出土土器からみた古代山城の時

つまり白村江の敗戦を契機とした西日本防衛ラインがなくなっても、これら3城は維持されるので、こうして3城は新たな政策任務を付与された段階に入るのではないでしようか。律令制による蕃

国・夷狄に対する新たな体制に入っただけではないかと思ひます。そして九州においては、隼人に対する夷狄政策の変化があるのではと思ひつてゐます。

ただし、同じ夷狄といつても、蝦夷と隼人では内実が違います。隼人は夷狄ではないという説もあります。私自身は、蝦夷も隼人も夷狄と考えていますが、隼人は神話にも登場します。隼人の始祖とされる海幸は、天皇に続く山幸の兄で、兄と弟の關係にあります。先ほど述べました神話ですが、釣り針をめぐつて海幸と山幸が争い、山幸が隼人の祖となる海幸を隷属させるという話になっています。

ところが八世紀の七一〇年代に、隼人に対する夷狄観が変わつてくると（永山修一『隼人と古代日本』）、夷狄視されなくなります。隼人に対する夷狄観がなくなると、律令制国家の対処の仕方も変化するのはないか、というように考えています。

三 肥後国と鞠智城

第三章は肥後国と鞠智城という地域研究にあたります。

私が先ほどから申し上げているように、大野城・基肄城・鞠智城は、大宰府体制の一環として捉えられていると思っていました、その中で鞠智城の役割を考えていくことにしたいと思います。

かつて坂本経堯さんが、鞠智城の3つの役割を指摘されています。①大宰府の支援、②有明海方面

出土土器からみた古代山城の時期消長表

[illegible]

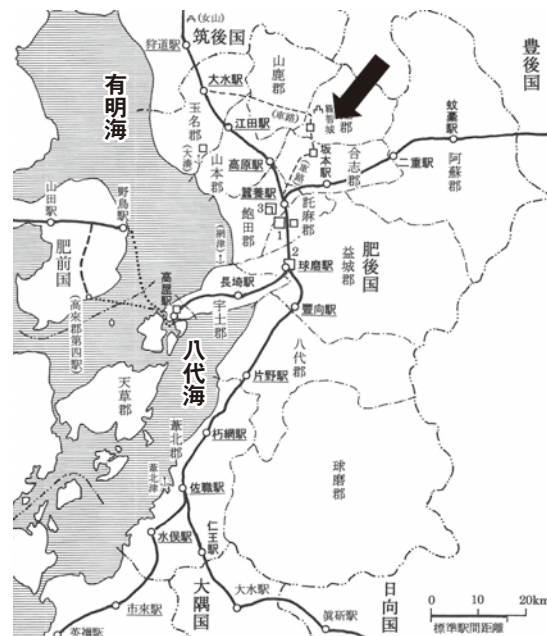
図3
(赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」
『月刊文化財』631、2016年)

矢野さんによれば、「管理棟的建物群はそのまま存続するものの、掘立柱の総柱建物礎石建物に建て替えられるなど、施設の耐久性向上が図られるのが特徴として挙げられる。その一方で、土器の出土が皆無に等しく、最低限の人員が配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じたのもこの時期となる」ということです。つまり、夷狄としての隼人観が変わり、隼人政策に変化があるとす

す。これまでの鞠智城の研究によって、「鞠智城跡変遷表」が作成され、鞠智城における築城・展開の諸画期が明らかにされています（『鞠智城跡Ⅱ』ほか）。この変遷表の第三期に注目したいと思います。八世紀の第1四半期後半から第3四半期にあたります。矢野裕介さんの研究整理によりますと、鞠智城の転換期にあたっています（「鞠智城の変遷に関する一考察」）。

矢野さんによれば、「管理棟的建物群はそのまま存続するものの、掘立柱の総柱建物礎石建物に建て替えられるなど、施設の耐久性向上が図られるのが特徴として挙げられる。その一方で、土器の出土が皆無に等しく、最低限の人員が配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じたのもこの時期となる」ということです。つまり、夷狄としての隼人観が変わり、隼人政策に変化があるとす

す。これまでの鞠智城の研究によって、「鞠智城跡変遷表」が作成され、鞠智城における築城・展開の諸画期が明らかにされています（『鞠智城跡Ⅱ』ほか）。この変遷表の第三期に注目したいと思います。八世紀の第1四半期後半から第3四半期にあたります。矢野裕介さんの研究整理によりますと、鞠智城の転換期にあたっています（「鞠智城の変遷に関する一考察」）。



（『古代山城鞠智城を考える』山川出版社、2010年）

図4
（木下良『事典日本古代の道と駅』、吉川弘文館、2009年）



（『新版古代の日本』3 角川書店、1991年）

図5
（草場啓一「阿志岐城跡」『古代文化』61-4、2010年）

ば、矢野さんの指摘に適合すると思います。隼人政策の変化が、鞠智城にも及んでいるのではないのでしょうか。

むすびに

最後に、結びにかえて簡単にまとめます。

筑紫は半島と大陸の蕃国、そして九州南部の隼人対策の地域として「辺要」としての扱いでした。具体的には大宰府と筑紫城がその拠点となります。その筑紫城の中に大野城・基肆城・鞠智城が位置づけられます。この3城は、広く大宰府防衛の一環として捉える必要があります。ところが、白村江の戦いで倭国・百濟連合が唐・新羅連合に大敗します。敗戦以降、唐・新羅連合に対する防衛体制が構築されます。それが壱岐・対馬から高安城までの西日本防衛ラインだと思っています。

その西日本防衛ラインは、大宝令制による軍団体制が確立し、唐・新羅との外交関係が安定すると廃止されるようになります。筑紫城としては、大野・基肆・鞠智城は蕃国・夷狄に対する「西辺」の役割として残されることになりました。しかし、隼人への夷狄観の変化にともなって、鞠智城の役割が変化したと考えられます。

文献史料でははっきりできませんが、今後、鞠智城第3期における発掘調査がさらに進めば、矢野さんの指摘がさらに具体的になるかと期待しています。

その後、いくつかの変遷があるかと思いますが、文献では兵庫・不動倉の記事があり、それらが重要な意味を持ってきます。今回の報告では十分に話せませんでしたが、筑紫には西海道以外から派遣された防人の停止の時期があります。報告のため改めて年表を作りましたが、確かに短期間に防人の停止が繰り返えされています。防人が停止されますと、筑紫の兵士が動員されています。明らかに筑紫は、辺要地域として重視されていたことが分かるかと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

(参考文献)

- 狩野 久 「瀬戸内古代山城の時代」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年
亀井輝一郎 「大宰府覚書1・2」『福岡教育大学紀要』53・54、2004・2005年
坂本経堯 『肥後上代文化の研究』坂本経堯先生著作集刊行会、1979年
永山修一 『隼人と古代日本』同成社、2009年
三上喜孝 「古代北方辺要国の統治システム」『古代国家と北方世界』同成社、2017年
矢野裕介 「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』2018年